



写真「22歳の啄木(明治41年)」
石川啄木記念館提供



初版本『一握の砂』(No.16)
石川啄木記念館提供

「石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし」(No.15)

故郷・渋民村を追われるように出て行った苦い経験を持つ啄木。一方民子は奈良に進学する時も、埼玉へ引越す時もふるさとの人々の温かい声援を受けて旅立ちました。

多感な学生時代、民子は平凡な生涯を送るより、啄木のように数奇な運命の中で生きてみたいとあこがれていました。しかし現実には、我が子の死産や離婚など、数奇とはいえ様々な苦難に見舞われます。人々から期待された分、故郷は次第に帰りにくい場所となっていました。

「地に届くばかりの氷柱 冴ゆるとふ
帰り住めとは言ひ来ずなりぬ」(No.20)

と、第三歌集『無数の耳』で民子はその心境を詠んでいます。しかし、晩年には複雑な故郷への気持ちにある程度の整理がついたのか、岩手からの講演依頼を引き受け、故郷を懐かしむ歌も詠むようになりました。

写真「盛岡高等女学校時代の民子」(No.3)
啄木に憧れ、歌を詠みはじめた頃



参考文献

『新潮日本文学アルバム 6 石川啄木』 岩城之徳/編 新潮社 1984年
『青みさす雪のあけぼの-大西民子の歌と人生-』 原山喜彦/編 さきたま出版会 1995年
『回想の大西民子』 北沢郁子/著 砂子屋書房 1997年
『盛岡中学校時代の石川啄木』 森義真/著 岩手県立盛岡第一高等学校 1997年
『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』 さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年
『啄木-ふるさとの空遠みかも-』 三枝昂之/著 木阿弥書店 2009年
『石川啄木-愛と悲しみの歌 企画展-』 山梨県立文学館/編 山梨県立文学館 2012年
『啄木の親友小林茂雄』 森義真/著 盛岡出版コミュニティー 2012年
『啄木ふるさと人との交わり』 森義真/著 盛岡出版コミュニティー 2014年
『大西民子-歳月の贈り物-』 田中あさひ/著 短歌研究社 2015年
『石川啄木の百首-歌は私の悲しい玩具である。-(歌人入門 01)』 小池光/著 ふらんす堂 2015年
「短歌」昭和61年3月号 角川書店 1986年
「現代短歌」平成28年3月号 現代短歌社 2016年

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で逡空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2022年1月7日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460



偉大な先輩

一啄木に想いを馳せた民子一

2022年1月7日(金)~3月4日(金)

No	種別	内容	所蔵者
1	自筆原稿	「歌ひとすじ」	
2	写真	「盛岡天満宮の啄木歌碑」	石川啄木記念館
3	写真	「盛岡高等女学校時代の民子」	
4	自筆原稿	「挽歌を作りつづけた三十年」	
5	自筆原稿	「はたらけど はたらけど猶わが生活楽にならざり ちつと手を見る」 石川啄木 作 大西民子 筆	
6	自筆原稿	「ころよく 我にはたらく仕事あれ それを仕遂げて死なむと思ふ」 石川啄木 作 大西民子 筆	
7	自筆原稿	「性別にて差をつけし 辞職の勧告には屈し給ふなど勵して別る」	
8	自筆原稿	「たれも同じ不安を持ちて働くと階段を書庫へくだるとき思ふ」	
9	自筆原稿	「頬につたふ なみだのごはず 一握の砂を示しし人を忘れず」 石川啄木 作 大西民子 筆	
10	自筆原稿	「いのちなき砂のかなしさよ さらさらと 握れば指のあひだより落つ」 石川啄木 作 大西民子 筆	
11	自筆原稿	「ゆゑもなく海が見たくて 海に来ぬ ころ傷みてたへがたき日に」 石川啄木 作 大西民子 筆	
12	自筆原稿	「北の涯の海のひびきのなつかしく失ひし夢また復るなし」	
13	自筆原稿	「沖をゆく船のあかりに執しぬしひととき過ぎて還るさみしさ」	
14	書籍	『風水』大西民子 著 1986年8月刊行・初版 沖積舎 掲載歌「うるほひて固まる砂と思ふまで鎮まりてありこよひのわれは」	
15	自筆原稿	「石をもて追はるるごとく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆる時なし」 石川啄木 作 大西民子 筆	
16	(写真)書籍	『一握の砂』石川啄木 著 1910(明治43)年12月刊行・初版 東雲堂書店	石川啄木記念館
17	書籍	復刻版『一握の砂』 名著復刻全集編集委員会 編 1980(昭和55)年12月 日本近代文学館	
18	書籍	『私の短歌入門』山本友一 編 1977年7月刊行・初版 有斐閣 掲載文「生活の核として『私の短歌入門』より」	
19	自筆原稿	「神無月 岩手の山の 初雪の眉にせまりし朝を思ひぬ」 石川啄木 作 大西民子 筆	
20	書籍	『無数の耳』大西民子 著 1966年7月刊行・初版 短歌研究社 掲載歌「地に届くばかりの氷柱 冴ゆるといふ 帰り住めとは言ひ来ずなりぬ」	
21	自筆原稿	『野分の章』大西民子 著 1979年11月刊行・初版 牧羊社 掲載歌「父母の墓さへあらぬふるさとの馬の祭りをテレビは見しむ」	
22	日記	受験の時の日記 1940(昭和15)年12月26日~1941(昭和16)年1月15日	

右の所蔵者欄に記載がないものは、大宮図書館所蔵です

1 啄木の歌との出会い



写真「盛岡天満宮の啄木歌碑」(No.2) 石川啄木記念館提供
民子が啄木を知るきっかけになった歌碑。1932(昭和8)年に建立された。

大宮ゆかりの歌人・大西民子は、1923(大正13)年に岩手県盛岡市に生まれました。城南尋常小学校の3年生になったある日、クラスで学校近くの天満宮を参拝した民子は、境内に建つ碑に目が留まりました。碑には下記の石川啄木の歌が彫られており、幼い民子には特に啄木という名前の響きが印象深く残ったそうです。

「病のごと 思郷のころ湧く日なり 目にあをぞらの煙かなしも」

※啄木は第一歌集『一握の砂』から、歌を三行にわけて書いた「三行詩」という形式をとりいれました

その啄木の影響で、高等女学校時代から短歌を作るようになった民子は、歌はもちろん、それ以上に各地を流転した啄木の人生に惹かれるようになります。民子が、あえて遠方の奈良女子高等師範学校への進学を選んだのも、啄木のように生きたいと願ったからでした。当時の心境について民子は「いかにも文学の徒らしい啄木の一生に憧れる、今にして思えばいかにも愚かな憧れであったが、両親と姉と妹がいて、何不自由ない生活をしていた少女時代の傲慢であったろう」とも書いています。

2 はたらけど……

自分や会社の都合で職を転々としながら、北海道や東京を彷徨い、貧しい生活を送った啄木は

「はたらけど はたらけど猶わが生活楽にならざり ちつと手を見る」(No.5)

と苦しい自分の生活を詠んでいます。一方、民子は大宮に来てから公務員として県立文化会館から県立図書館へと順調に勤めを続けることとなりますが、女性としての立場もあってか、啄木同様、度々仕事の悩みを歌にしています。

浦和図書館時代には、

「たれも同じ不安を持ちて働くと階段を書庫へくだるとき思ふ」(No.8)

と、働きながらも感じてしまう不安を詠んでいます。

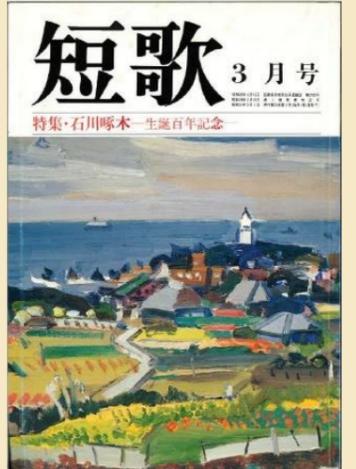
1977(昭和52)年、53歳の民子はこれまでの自分の人生について「挽歌を作りつづけた三十年」(No.4)というエッセイを書きます。その中で「職場の歌が書けたりしたとき、声を出して読んで見て、啄木そっくりなのにあきれることがある」と語っています。



自筆原稿「はたらけど はたらけど猶わが生活楽ならざり ちつと手を見る」
「石川啄木百首選」より (No.5)

雑誌「短歌」昭和61年3月号
1986年刊行 角川書店

本号で、石川啄木生誕百年を記念した特集が組まれました。
選歌を任された民子が、「石川啄木百首選」として3888首から100首を選んでいきます。



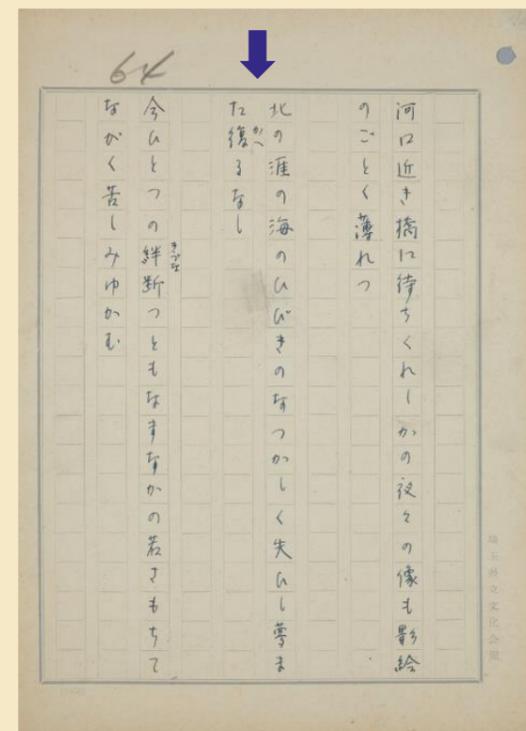
3 海の記憶

岩手県内陸の洪民村で育った啄木ですが、北海道に移り住んだこともあり、海や海岸と思われる光景を詠んだ歌が散見されます。同じく内陸で生まれ育った民子も、海岸の町陸前高田に父母が引っ越したり、自身も釜石で教員を勤めたこともあって、海は比較的身近な存在でした。

1981(昭和56)年に刊行した自選歌集『海の記憶』のあとがきで、「それぞれの日に見た海は、目を閉じて呼び返すと、それぞれの波の音をよみがえらせる。(中略)今はもう、母も妹もこの世にはなく、どの海の記憶もさびしいものになった。どこかに、新しい海を見つけなければならない、今の私はそう願っている」と書いています。民子にとって海は、恵まれた学生時代や、釜石での新婚生活など幸福を思い出させるイメージだったのででしょうか。第一歌集『まぼろしの椅子』では、早くも

「北の涯の海のひびきのなつかしく
失ひし夢また復るなし」(No.12)

と、懐かしい東北の海と、幸せだったを過去を詠んでいます。



自筆原稿「北の涯の海のひびきのなつかしく失ひし夢また復るなし」(No.12)